

初夏の日差しに輝く北アルプスと松本市街地。時代の潮流を乗り越え、魅力ある郷土を次世代に伝えたい(松本市寿豊丘から本社ドローンで撮影)



《第1部》ふるさと×アップデート

輝き安らぐ地域 次代に

郷土に誇り力合わせよう

未来をひらく

北アルプスの残雪もだいぶなくなってきた。雨が洗った新鮮な青空の下、街と田園が日差しに輝く。郷土の魅力を実感する季節だ。

中信地域は、豊かな自然の恩恵を土台に、高度な産業と薫り高い文化を育んだ。松本、安曇野、塩尻の3市だけで製造品出荷額は年間1兆7000億円を超え、県内トップの産業集積地だ。ブランド力のある農産物が実り、教育、医療も質が高い環境が整う。国宝松本城天守、重要文化財の旧松本区裁判所庁舎(松本市歴史の里)、旧制松本高校校舎は、歴史遺産を守る

うとする市民の運動で破壊指し、力を合わせたい。を免れた。

住みたい街などの全国ランキングにもたびたび登場する地域だが、今後も魅力を持てるだろうか。高度経済成長期以降の50年、都市部への若者の流出と少子高齢化は止まらず、地方は活力をそがれ続けてきた。さらに新型コロナウイルスの感染禍は、これまでの延長では予測できない変容をもたらそうとしている。国を挙げて推進が図られる「DX(デジタルトランスフォーメーション)」は、地域コミュニティーにも情報通信技術を浸透させ、人のつながり方を大きく変えていくだろう。

市民タイムスは10月、昭和46(1971)年の創刊から50周年となります。同じ地域に暮らす当事者の視点に立ち「郷土の応援団」として新聞発行を続けてきました。その地域は今、時代の岐路に立っています。これからも私たちの郷土が安心して暮らすことができ、誇りが持てる地域であり続けることを応援したい。そんな願いに立ち、新企画「未来をひらく」を連載します。

次世代のために明るい未来を。誰にも共通する希望であり、責任でもある。歴史的な転換点に立つ今だからこそ、豊かで住みやすく、誇りの持てる郷土を目指す。



15面に続く

《第1部》ふるさと×アップデート



松本市出川1のさくら保育園。週2回保育を手伝う山本貴士さん(71)＝同市中山＝の周囲に園児が集まる。優しくてギターも弾けて、粘土のアイスクリームも新聞紙の剣も作れる「たかしせんせい」がみんな大好きだ。祖父母と孫が同居する世帯園児に人気の山本さん。「ここに来ると元気になる」とやりがいを話す。

未来をひらく プロローグ

壁乗り越え前へ進もう

が少数派となつて久しい。山本さんは、市が多世代交流を願つて市立保育園に配置するシルバー保育サポーターの一人。会社を定年退職後にサポーターとなり、6年目になる。「ここに来ると体調が良くなる。元気をもらつてい

る」と充実感を語る。「この子たちが大人になるころも、子供が自由で、余計な心配が要らない社会であつてほしい」と願つた。

少だ。大規模地震や豪雨災害が頻発し、地域防災力の強化が迫られているのに、最前線に立つ消防団員は減少し、自治会は役員の手不足に苦しむ。祭りや行事が存続の瀬戸際に立つ集落もある。

松本市島内の男子大学生(21)は「近所に若い人がいない。進学で東京に行く友達が多い」と寂しがり「地域の活動を担つていたり、引き継いだりする人がほとんどいない」と先行きを懸念する。

今の子供が大人になり子供を育てるころ、この地域はどうなつていくのだろうか。穏やかに住みやすく、魅力と活力を保つていてほしい。しかし、足元を見つめると樂觀でない課題が横たわる。

公共交通が行き渡らない地域の高齢世帯はマイカーを持たなければ、日々の買い物や通院をどうするのか。安曇野市穂高有明のクラブ作家女性(63)は「一人暮らしの高齢者が心配。出歩かないと精神的にも老いてしまう」と心配する。

国際化で中信地域でも外国にルーツを持つ住民が増えていくが、多文化共生の理念と地域社会の現実との間にギャップはないか。非正規雇用の増加や絆の希薄化で、経済的にも精神的にも孤立した世帯や子供がいることもどこか遠くではなく「隣近所の問題」だ。

大きな時代のうねりの中で、昔ながらのふるさと像では収まらない課題が生じている。性別、年齢、居住年数、国籍、障害の有無を問わず、幅広い人材が同じ地域に暮らす仲間として力を集められるかが、解決の鍵となりそう

「きつとあしたはいいんさくら保育園の子供が歌う。明るい新時代を目指し、地域も心を合わせたい。」

「未来をひらく」第1部は「ふるさと×アップデート」として、地域課題の現場取材し、解決の糸口を探った。

（高石雅也）

（高石雅也）